



## 暮らす旅 京都 やっかいな日常

文・写真 / 松岡伸吾 (暮らす旅舎)

京都市京セラ美術館の庭にある杉本博司氏の茶室



亭主松本さんのセンスが光る招狸庵のバー

懇意にしている料理屋「招狸庵」の25周年のお祝いで訪れた半年ぶりの京都。新型コロナの影響で新幹線はガラガラ、海外からの観光客もなく街も静か。

京都駅近くのホテルで開かれた宴席は、検温と消毒を終え、マスクして着席。高瀬川、一之舟入を臨む店の佇まいはもちろん、松本さんの料理と人柄に惹かれる常連客の皆さんと楽しいひと時を過ごした。とはいえ、やっかいな「新しい日常」はいつまで続くのだろうか。

翌日は、祝う会の発起人でもある冷泉家の見学に参加した。同志社大学の横に立つ、木版手刷りの唐長の襖紙に彩られたお公家さんの住まい。見学に先立つ当主の話では、敷地内に新しい土蔵の建設計画があり、寄付を募っているとのことだった。国宝も多い古文書の所蔵が目的だが、公的な援助は鉄筋コンクリート造でないとできないのだそうだ。千年も古文書を守ってきた実績ある土蔵だということに。

今年、岡崎の京都市京セラ美術館や烏丸通の新風館のリニューアルが完成した。両方とも大正から昭和初期の建物だが、当時の外観イメージを残しながらの改装だ。春に完成されながら、コロナ禍でオープンが遅れた美術館は杉本博司展を開催。新風館はニューヨーク発のエースホテルやブランドショップが入り、多くの来客を集めていた。

古い街並みが失われつつある京都ゆえか、歴史ある寺社や祇園花見小路のような観光地に人々は殺到する。静かに古都を散策したいなら、暮らす旅舎の本『京のろおじ』（CCCメディアハウス）で紹介した、街の隅っこに残る京都がお勧めだ。



藤原定家を祖先に持つ「和歌の家」冷泉家。襖には様々な唐紙が貼られている



明治に開発された岡崎は道も広々。平安神宮の鳥居の奥が京都市美術館



新風館にできたエースホテルのロビー